

井上靖「闘牛」論

—材料の意匠化と悲哀—

高木伸幸

はじめに

昭和二十四年十二月号の『文學界』に発表された井上靖の「闘牛」⁽¹⁾は、終戦間もなく創立した新興新聞社が、伊予W市の伝統競技の牛相撲を大阪で開催させる事業の顛末に、主人公津上と愛人さき子の関係も絡めつつ描いた小説である。第二十二回（昭和二十四年下半年）芥川賞を受賞し、今日ではこの作家の出世作と見做されている。

井上靖はこの「闘牛」の執筆について、次のように書いている。

廿二年一月新大阪新聞社主催で闘牛大会が西宮球場で開かれた。

（中略）一日私も闘牛見物に会場へ出掛けた。みぞれの降る寒い日だった。天候に崇られてその日の入場者は極めて少かった。リングの中央で、角を突き合せたなりで微動だにせぬ二頭の牛。それを取巻くまばらな観衆。垂れ下がっているのぼり。スタンドの所々から人々は外とうのえりを立てて声もなくリングを見降ろしている。その会場に立てこめている異様な空気が私の心に冷たく突き上げて来た。（中略）私はその日の会場の詩を書きたいと思

った。その会場の悲哀は、事業そのものから来るものではなく、終戦後一年半の、あの時代の日本が、日本の社会が、日本人のすべてが、意識すると、しなやかに拘らず、だれも持っていた悲哀に他ならなかつたから。

実際にはこの闘牛大会は新聞社の事業としては宣伝効果からみても大きい成功をおさめ、新大阪はために盛名を天下にとどろかしたが、私は勝手にそこから会場の詩だけを拝借して来た。会場の詩を頂きに置いて、それをささげ持つ台座をフィクションで構築し、時代相を把握した一種の社会小説を意図した。

（「『闘牛』について」⁽²⁾）

また「私の履歴書」⁽³⁾では、「闘牛」の執筆のために、井上の友人で当時の新大阪新聞編集局長だった小谷正一氏―「闘牛」の津上と同じポストにいた人物―から、「事業に関するすべてのことを聞」き「その全部をノートした」とも述べている。

これらの言葉を通して、「闘牛」の成立過程を覗うことができる。

「闘牛」は昭和二十二年一月に西宮球場で開催された新大阪新聞社主

催の闘牛大会をモデルに、小谷正一氏から詳しく取材した上で執筆されたフィクションであり、作者はその闘牛大会の会場で感じた「会場の詩」、すなわち「終戦後一年半の、あの時代の日本が、日本の社会が日本人のすべてが、意識すると、しないに拘らず、だれも持つていた悲哀」を表した「時代相を把握した一種の社会小説を意図した」

それでは「闘牛」には、具体的にどのような「悲哀」が表現されているのだろうか。その「悲哀」は、作者の意図した通りに、終戦間もない日本の時代相が持つていた「悲哀」を表し、「闘牛」一篇を「一種の社会小説」として成り立たせていると言えるであろうか。

以下、「闘牛」について悲哀感がどのように表現されているかに着眼しつつ、考察を進めてみることにする。

—

「闘牛」はあくまでフィクションの小説であるが、その成立過程を考えると、作品中、特に闘牛大会に関する部分は、少なからず新大阪新聞社主催の闘牛大会から材料を借りている可能性が高い。そこでまず初めに、当時新大阪新聞社が発行していた『夕刊新大阪』(以下『新大阪』)の闘牛大会開催に関連する記事を参考にしつつ、「闘牛」がモデルからどのくらい材料を借り、どの程度作者の独創によって作られているのか、わかる範囲で確かめておきたい。「闘牛」のどの部分に作者の独創があるかを明らかにすることで、作者の意図をより正確に把握できる筈である。

結論から述べると、「闘牛」において作者の全くの独創は、少なくとも闘牛大会に関する部分については、ごく僅かだと言えそうである。闘牛大会に関する記述のほとんどが、その典拠を『新大阪』の記事の中に見出すことができる。

例えば、W市の豪農の当主が話してみせた、相撲牛が先代の仇討ちをした講談そのものの逸話は、それと全く同じ話を昭和二十二年一月十九日付『新大阪』第二面掲載の「勝牛は家門の誉れ」と題された小さな記事に見ることができ、それから大会きつての呼びものであった三谷牛と川崎牛の試合が、一時間以上経っても勝負が決せず、試合続行の可否を観客の拍手によって決定した下りは、大会初日の横綱対決の勝鬨(梅崎牛)と磐石(西岡牛)の試合報告の記事にその典拠が見られる。また神戸市内と大阪市内で牛行列をやらせたことや、街々に闘牛大会宣伝のサウンドトラックがつつ走ったこと、中之島公園から景気づけの花火を上げたことなど、全て『新大阪』の記事を見ると実際の出来事を参考にしたものであることがわかる。さらに作品中の新聞『大阪新夕刊』(以下『新夕刊』)に掲載される「闘牛ばかり彫っている老彫刻家」の写真入りの記事、「南予に闘牛を訪ねて」という特派員記事、「日本ニュースや世界ニュースが会場の情景をフィルムにおさめる」といった「前景気をあげる宣伝記事」など全て『新大阪』にそれと同様の記事を見ることができ、¹⁰⁾「連載漫画にも、牛が登場して来た」のも、『新大阪』の通りである。作者がこれらを、『新大阪』の記事を参考にしていたのか、小谷正一氏の話を参考にしていたのか、どちらかわからないが、いずれにしても作者の独創でないことは間違いないだろう。

このように『新大阪』の記事により、「闘牛」がかなりの部分の材料をモデルから借りていることがわかる。だが、作者はその借りてきた材料をそのまま作品中に取り込んでいるのではない。先の三谷牛と川崎牛の試合続行の可否を観客の拍手に問うた場面も、典拠である梅崎牛と西岡牛の試合の場合は、観客の拍手によって試合を続行するもさらに勝負は決せず、結局勢子が総出で両牛を引き止め、引き分けに終わっている。作品中の三谷牛と川崎牛の場面は、試合続行によって赤い牛が勝つことになるが、これは次節で述べるように、「悲哀」のテーマを表すための工夫である。

作者はモデルから借りてきた材料を、部分的に改めたり、並べ換えたり、拡大するなど工夫して作品に取り込んでいる。自己のテーマを表すために、材料を意匠化しているのである。そうした作者の工夫がいくつか見られる中で、とりわけ目を惹くのは、事業に関する日程の変更、期間の拡大である。

「闘牛」では、「来春（註、昭和二十二年）一月二十日から三日間阪神球場で闘牛大会を開催するという社告」が『新夕刊』の一面に「角と角とを突き合わしている二頭の牛の写真をカット」にした「誰の眼をも惹く大きな箱もの」として組み込まれ、開催の約一カ月前の前年十二月中旬に発表されている。しかし『新大阪』では、「震災救済資金募集・南予闘牛大会（新大阪新聞社主催・宇和島市後援・南予牛相撲協会協賛）」を、昭和二十二年一月二十五日（土）、二十六日（日）に西宮球場で開催する社告が、同年一月十四日に小説の記述その通りの牛の写真をカットにした大きな箱ものとして、一面に組み込んで発表されている。井上はモデルから社告のカットのスタイルを借

りつつも、開催日程を「一月二十五日（土）、二十六日（日）」から「一月二十日から三日間」に改め、さらに社告の発表は一カ月程度も早くしているのである。この社告の発表を早めたことは、必然的に作品の中の『新夕刊』に、社告の後から掲載が始まる闘牛関連の記事を、モデルよりも早い時期から開催日まで長期間に亘って、大量に掲載させ続けることになる。

例えば『新大阪』では、社告発表の翌十五日は大会開催の社告^{（1）}が載るのみであり、闘牛関連の記事と言えるものが掲載されたのは、社告発表の翌々日で開催日の九日前の一月十六日が最初である^{（2）}。それに対して「闘牛」では、「三箇日がすんでからの新夕刊は、目立って闘牛に関する記事が多くなった」と記す。つまり開催日の十六、七日前から多くの闘牛記事が載り始めている。さらに『新大阪』が一面、二面ともに闘牛関連の記事を載せ始めたのは開催日六日前の十九日^{（3）}からであったが、「闘牛」では、「闘牛大会が十日程先に迫ると、大阪新夕刊は一面も二面も闘牛大会の記事で塗りつぶしはじめ」ている。

作者井上はこのように長期間に亘って闘牛関連の記事を多量に掲載させ続けることで、「牛の新聞」と陰口を叩かれるほどに、『新夕刊』の過剰な闘牛記事の扱いを強調して描こうとしたと考えてよいだろう。そうした作者の意識は、長期に亘って『新夕刊』に掲載される闘牛関連の記事の、モデルからの取り込み方にも覗うことができる。例えば「闘牛」の『新夕刊』では、三箇日が過ぎてから「カルメンのホセが当り役の有名なオペラ歌手が、闘牛について語っているかと思うと、その翌日の紙面では、スポーツ愛好家として知られているF伯の闘牛漫談が大きく掲載され」、さらに「『専門家の立場から』といった人

を喰った見出しで、新進拳闘家が闘牛を論じている日もある」といった紙面が続くことになっているが、『新大阪』を見ると、一月二十三日付二面に「興奮のツルギ闘牛」といった大見出しの下に、大会に寄せる言葉として、オペラ歌手藤原義江氏、拳闘家泉英一氏、宇和島出身のスポーツ愛好家二荒芳徳伯の三つの談話が同時に掲載されている。つまり作者は同じ日に掲載されていた記事を、別々の日の、独立した記事に拡大し、かつ二荒芳徳伯談はF伯の漫談に改め、『新夕刊』が三日間に及んで多彩な記事を掲載させたことにしている。ちなみに拳闘家泉英一氏談には「ケントウの参考になる」という小見出しが付いているが、それを材料に「専門家の立場から」といった見出しに作り変えているところに、作者の工夫が感じられる。

また「闘牛」の大阪新夕刊新聞社は、「闘牛大会の歌」を懸賞募集したのに始まり、「晴れの出場牛二十二頭の大会名」を募集し、さらに「勝牛の予想投票」などもやったことになっているが、新大阪新聞社が実際に企画したのは、このうちの出場牛二十二頭の大会名募集のみである。その企画のため二十日付、二十一日付両日の『新大阪』二面に「南子闘牛大会闘牛の通称を募る」という見出しの社告を出し、大会初日の二十五日付二面に結果を発表している。その大会名募集の社告が載った二十一日の一面と、その翌日の二面、翌々日の一面に「懸賞何牛が勝つか？」という見出しの広告が掲載されているが、これは新大阪の企画ではなく、大星社なる会社の懸賞募集を兼ねた広告である。大星社が如何なる会社かわからないが、モデルでは新聞社の企画でなかった懸賞募集を、井上は作品中で新聞社の企画として取り込んだことがここからわかる。もう一つの「闘牛大会の歌」の懸賞募

集は、『新大阪』の紙面を見る限り全く見当らない。この「闘牛大会の歌」は、作品中では連日つつ走るサウンドトラックのマイクから街々に流されていたことになっているが、先に述べたサウンドトラックの出勤を知らせる『新大阪』の記事を読むと、実際にサウンドトラックは走っていたが、流していた曲はカルメンである。モデルにはなかった企画を作者が作り出したようだが、大会前日の二十四日付『新大阪』の二面に宇和島市出身の詩人山内隆氏から新聞社に寄せられた自作の「闘牛民謡」二篇が掲載されているので、あるいは作者はここから牛相撲大会の歌の懸賞募集の着想を得たのかもしれない。

一日分の記事を大げさに三分に拡大し、モデルでは新聞社の企画でないものまで新聞社の企画にしてしまう—こうした材料の取り込み方が、闘牛記事を長期間に亘って掲載し続けることと併せて、『新夕刊』の「牛の新聞ぶり」を大げさなまでに強調していることは言うまでもあるまい。そして「牛の新聞」ぶりを強調することで、「闘牛」における大阪新夕刊がこの事業に如何に打ち込んでいるか、津上や尾本らがどれほどこの事業に情熱を傾けているかを表現しようとしたと言えよう。特にその新聞の編集の采配を振る津上の場合、さき子から「//やくざ//な性格」と言われ、尾本に「一点信拠し難い痴人の欲情のような溺れ」を感じさせた、彼の無謀なまでに強引で、ある種の危険を伴った情熱を浮かび上がらせるのに役立っていると考えられる。さて以上は主に大会開催の社告発表から開催日に至るまでの間についてであるが、開催日当日の記述について、作者は注目すべき重要な工夫を行っている。

闘牛大会の初日、作品中には次のような記述がある。

ある。問題ではあっても、宣伝や準備のため、相当に早くから日時を決めなければならない。ここに、賭の要素が入り込む」と論じているが、この「賭け」の要素は、闘牛大会という事業がもとも持っている要素ではなく、井上靖が「雨天順延不可」に設定することで生み出した要素である。どうやらここに作者の意図を解く鍵の一つが隠されているようにある。

さらにこのことと併せて注目されるのは、モデルでは十九、二十日の『新大阪』の社告から前売券が発売されていたことがわかるが、「闘牛」においては、大会の前日と前々日に、東洋製薬の社会三浦吉之輔が入場券全部を譲って欲しいと申し出てくるところから見、前売券を発売していなかったらしいことである。しかもこの三浦の申し出を、前々日は津上に、前日は尾本によって断らせ、事業の大失敗を免れることのできた機会を、敢て逃させている。こうした設定を見ると、作者はこの闘牛大会を失敗させたかった、どうしても失敗させねばならなかった、と考えざるをえない。ここにもまた作者の意図を解く鍵の一つが潜んでいそうである。

つまり作者は闘牛大会を「賭け」の事業として設定し、その事業が失敗に終わる過程の中に様々な人間を関らせて描くことで、「悲哀」のテーマを表現しようとしたのではないかと考えられるのである。そのように考えると、先に検討した津上らの闘牛大会に向けた情熱も、彼らが如何に事業に賭けていたかの強調であり、同時に「悲哀」を表すための一つの工夫と言えよう。事業に賭ける情熱が激しければ激しいほど、それが敗北した時は、「悲哀」も深くなるからである。

ここに来て、この事業の発端となった、田舎興行師田捨松が大坂

新夕刊編集局長津上のもとに、闘牛大会開催の企画を持ち込んで来た際の会話が想起される。

「それというのも土地の人が、むかしから牛の勝負に賭けるためで―」

田代がこう言った時だった。

「賭けるの!」

と津上は反射的に訊いた。

W市で年三回開かれる大会では、いまでも観衆の殆ど全部が牛の競技に賭けていると言う。その田代の説明は、それまで田代の話を素通りさせていた津上の心に、突然奇妙な屈折の仕方とびこんできた。(中略) 賭ける、こいつはいけると津上は思う。阪神の都会地で行なっても、W市と同じようにそこに集まる観衆のすべては賭けるだろう。終戦後の日本人にとって生きる手懸りといえ、まあこんなところかもしれない。

津上に闘牛大会開催を決意させたのは「賭け」の一語であった。私はその「賭け」を津上が「終戦後の日本人にとって生きる手懸り」と捉えているのに注目したい。この津上の「賭け」の解釈は、新興新聞社の大阪新夕刊が闘牛大会という「賭け」の要素を持った危険な事業に敢て挑んだ理由にも重なるのである。

春原昭彦著『日本新聞通史』によると、終戦後「GHQは、言論の独占を破壊する目的で地方紙の助成と新興紙の育成をはかり、さらに「GHQの新聞政策を体して、用紙割当委員会も、新興紙に対して優先的に用紙の割り当てを行った」ために「(昭和)二十一年には新興紙の創刊、復刊があいついだ」そうである。同書は昭和二十一年に

発刊した主な新聞として二十三紙を挙げ、その中に「闘牛」のモデル『新大阪』も二月四日に創刊された新聞として含まれている。

こうした新興紙の置かれていた状況は、「闘牛」にも「当時続々発刊されたつあった夥しい夕刊紙群の中であって」といった言葉に暗示されているが、とにかく『新夕刊』は数多くのライバル紙と闘って打ち勝つていかねばならなかった。そこで、生き残りの手段として、闘牛大会という「社運を賭した身にあまる大事業」に挑んだ、つまり闘牛大会に賭けたと考えられるのである。

観客は牛と牛との勝負に「賭け」、その競技を行う事業は、天候に成否を「賭け」、その賭けの事業に新聞社は社運を「賭け」る——闘牛大会における「賭け」はまさに三重に絡みあっているのである。そして、その「賭け」は、当時の特殊な状況下における「賭け」でもあることを考慮しなければならない。そのように考えると、闘牛大会という事業を通して「賭け」に挑み、敗北した人々を描くことによって、作者が終戦間もない日本の時代相が持っていた「悲哀」を表現しようとしたのは頷けるだろう。

しかし一方で、この作品における「賭け」と敗北の設定は、あまりに強引に失敗に持っていく印象を与える危険を孕み、次の田宮虎彦の批評のような疑問を生む原因にもなったようだ。

たゞ疑問がひとつだけ心に残った。それは、もし、この結末で、闘牛大会の当日が、主催者たちに好都合に三日間晴天が過ぎ、大会が成功していたらどうなつたかということであつた。

それは、雨であつたからこの作品が出来たのだという様な弁駁では、消し去ることの出来ぬ疑問である。さらに細かくいえば、

もし大阪新夕刊の社長尾本が、大会の切符を買いしめようという三浦の申し出を承諾していたらどうなつたかという疑問にもからまりあうのだ。

田宮の指摘は、作者が作品中に仕掛けた二つの設定上の工夫を見事に見破り、良くも悪くもこの作品の読みどころを突いている。あるいは事業を強引に雨による失敗に終わらせなくとも、作者の意図した「悲哀」が描けたかどうか、検討の余地があるのかもしれない。しかし今それを考えるべきではなく、別の機会に考察することとしたい。ここで重要なのは、作者が「賭け」とその敗北により、「悲哀」を表現しようとしたことである。

それでは闘牛大会に関つた人々それぞれの「賭け」と敗北は、どのように描かれているのであろうか。

二

「闘牛」の主要登場人物は、大阪新夕刊社長の尾本、同編集局長の津上、梅若興行部社長の田代捨松、阪神工業社長の岡部弥太、東洋製薬社長の三浦吉之輔、それに津上の愛人さき子の六人。この中で闘牛大会開催という事業における中心人物として働いているのは、社長の尾本と編集局長の津上、そしてこの企画を大阪新夕刊に持ち込んだ興行師田代の三人である。岡部と三浦はもともとこの事業に参加していたのでなく、途中から事業に加わりたいたと津上に申し出てきた人物であり、さき子の場合には津上を通して事業と間接的な関係を持つている

に過ぎない。

しかし事業において重要なポストに置かれている人物が、そのままこの物語の中心に置かれているかという点、そうではない。岡部と三浦が、物語でも脇役に甘んじているのは当然としても、事業における中心人物の中で、物語でも中心人物を演じているのは津上だけであり、残りの尾本と田代は脇役に退けられ、代りに事業には間接的にしか関わらないさき子が女主人公の位置に収まっている。津上とさき子を物語の中心に据え、田代と尾本を物語の周辺に配置した「闘牛」のこの人物構成は、この作品の「悲哀」のテーマを、闘牛大会という事業そのものが持っていた「悲哀」とは若干性質を異ならせたと見えそうである。

それでは、人々それぞれの「賭け」と敗北がどのように描かれているのか、まずは事業の中心人物でありながら脇役に置かれている、尾本と田代の二人から考えてみる。

社長の尾本は大阪新夕刊が行った「賭け」の最終責任者であることは言うまでもない。この事業における彼の「賭け」は、大阪新夕刊の「賭け」にそのまま重なる。それだけに大会初日に雨が降って失敗が決定的になると「際立って不機嫌」になり、最終日には「莫大な社の損害がいかに縮められつつあるかを知るに熱心」だった。尾本は大阪新夕刊の「賭け」の敗北を直接に被った人間と言える。

田代は闘牛大会の企画を大阪新夕刊に持ち込んだ、もう一方の責任者である。彼がこの事業を持ち込んで来たのは、「いつか一度は伊予の牛相撲を東京か大阪の檜舞台へ持って行くという夢」の実現のためであった。田代は闘牛大会の開催に田舎興行師としての「夢」を賭け

た。その「夢」の実現の為に、兄から借金までして大会開催を実現させるが、その結果は無惨なものに終わった。雨の大会初日に「いかにも不運な興行師といった落着き」を見せ、大会最終日に「周期的に絶望が襲っている」彼の姿に、自らの「夢」を賭け、敗北した人間の心が覗かれる。

このように闘牛大会の中で、尾本と田代は事業そのものに賭けていた人間とすることが出来る。それに対して物語の中心人物である津上とさき子の二人は、少し趣が異なっている。事業に直接関らないさき子はもちろん、社長の尾本に勝るとも劣らず大阪新夕刊の芯棒である筈の津上も、事業そのものに賭けてはいないようである。

彼らが何に賭けていたのか、先にさき子の「賭け」から考えてみよう。

それではさき子は今度ははつきりと憎しみの感情をこめて言った。「あなたは初めから何も賭けてはいないのよ。賭けられるような人ではないわ」

「じゃあ、君はどう？」

津上は何気なく言ったのだが、さき子は、はつとして息をのんだ。そしてさあつと自分でも気が付くほど血の気のひいた顔をゆがめて笑うと、

「もちろん、私も、賭けてるわ」

と一語一語切るように言った。実際さき子は賭けたのだった。君はどう、と津上に言われた瞬間、さき子は津上と別れるか別れないかの苦しい長い命題を、反射的に、いまリングの真中で行なわれている二匹の牛の闘争に賭けたのだ。赤い牛が勝ったら津上

と別れてしまおうと。

物語のクライマックスへの導入部分にあたる場面である。ここに、さき子が「津上と別れるか別れないかの苦しい長い命題」を牛の勝負に賭けていることが、はっきりと語られている。その結果、「赤い牛」が勝ち、さき子は津上と別れる決意をすることが暗示されて物語は幕を閉じるのであるが、しかし闘牛大会を通してさき子が何を賭けていたのか、この場面を見るだけでは本当の意味でわかったと言えない。

雨で中止になった大会初日の帰り、さき子は津上と二人で自動車に乗り、車中で失意の表情を露わにする津上を見て、次のように思う場面がある。

さき子は自動車に荒く揺られている手負うた愛人の顔をじっと見詰めていた。すっかり痛めつけられて喋ることも出来なくなっているこの生き物を、彼女は初めて自分のものとして眺めることが出来た。さんざん放蕩した道楽息子が失意の果てに、やはり誰でもない自分のところへ帰って来た。そんな母親の持つ勝利感に似たものが、さき子の思いをかすめた。

ここでのさき子の勝利感、津上の事業欲の大きさと、彼がさき子に向ける愛情の大きさと、どちらが勝るかの勝負にようやく勝つことのできた嬉しさだろう。だがそのさき子の勝利感は長続きしない。大会最終日の津上の様子を見て、さき子は次のような感慨を持つ。

その横顔にも人と面接したりする動作にもびちびちとした常の津上らしいアクセントがあった。いかにも新聞社の若い幹部らしい張りが遠くから見ている、さき子には眩しく感じられるのであった。一昨日は確かに津上の心のどこかに自分の坐る席があっ

た。自分でなければ誰も埋めてやれない空隙を津上は持っていた。津上にとってあれ程必要な女だと思つた確信を、いまのさき子は夢のこのように妙に儚く思ひ出すのであった。もう忘れようと思えば一年でも自分を忘れていられるであろうエゴイスチックな平常の津上がそこにはいた。すべては終つた。もう津上は再び自分のところへは戻つて来ないだろう。今日のさき子の心にはそんな気持が何故か、一つの動かすことの出来ぬ確信となつて生れて来るのであった。

さき子への愛情を置き去りにして、再び事業にのみ心を向けている津上の様子から受けたさき子の敗北感が、ここにはっきりと現れている。つまりさき子は闘牛大会を通して、津上の心の中で事業欲と彼女への愛情のどちらが勝つかを賭けていたのだ。さき子がクライマックスの場面で二人の関係の清算を二匹の牛の勝負に賭けたのは、事業欲に愛情が敗北したことを自分に納得させるための一つの手段であつたと言うべきだろう。さき子も闘牛大会の中で「賭け」、そして敗北した人間の一人である。

そして津上の「賭け」。率直に言つて、彼の「賭け」は極めて不可解である。津上は闘牛大会に激しい情熱を傾けるが、その情熱はどこか無謀な強引さを感じさせ、事業の成功に万全を期しているとは言い難く、おまけに大会初日に雨が降つても社の損失には無関心な素振りである。彼は尾本や田代のように事業そのものに賭けているとは思えない。その熱中ぶりから言つて、何かに賭けているのは確かであるうが、さき子からは「賭けられるような人ではない」と言われたりもする。

福田宏年氏は津上のそんな不可解な熱中ぶりを論じて、「ポジティブな動機から、行為そのものの、事業そのものに賭けているのではなく」「自らの中の、うつろなものの、空しいものに対する挑戦」だと言う。なるほど「酔えない眼が、柄にもなく酔おうとする謀叛気」とも書かれる津上の情熱は福田氏の言うような性格を含むと言えそうであり、あるいは彼が賭けているものも、その「うつろなもの、空しいもの」に由来するのかもしれない。しかしその「うつろなもの、空しいもの」が具体的に何であるのか、福田氏は全く説明しておらず、いま一つ説得力を欠く。

津上が何を賭けているのか、それを考える上で東洋製菓の社長三浦吉之輔との交渉に一つの糸口がありそうである。三浦は、前節でも述べたように、作品中の闘牛大会に前売券発売をなくしたかわりに登場させたとも言うべき人物で、ここに作者の意図を表すための大きな工夫があり、津上における「賭け」の性格も、この三浦との交渉の中に暗示されている可能性が高い。

三浦は大会開催の前々日に、大阪新夕刊の津上のもとに、入場券全部を二割引で譲って欲しいと申し出る。彼は二割引で買った全入場券に自社の製品の口中清涼剤「清涼」の小袋を添附して売り、宣伝にしたいと考えている。三浦にとつて都合のいい話のようだが、しかし大阪新夕刊も売上の二割を損するかわりに確実に金は入り、雨が降っても失敗はないことになる。しかも气象台はここ数日中に雨になると予想している。

津上はそんな大胆な三浦の態度にまず次のように反応した。

津上は自分の顔の頬のあたりの筋肉が妙に硬ばってゆくのを感じ

じた。どこか即答を迫っているような、自信満々たる相手の態度にむらむらと反撥を感じて来たのである。

三浦がさらに自分の申し出についてにやりと笑って「まあ一種の賭博ですな」と言ってみせると、津上の心は決まり、「御希望に副いかなる」旨を伝えた上で、彼は次のような言葉を相手に撲つけた。

新聞社としても、もともとこの仕事は賭博です。

三浦の「賭博」の申し出を、津上も「賭博」の言葉で斬り返しているが、津上にその言葉を吐かせたのは「自信満々たる相手の態度」であった。翌日に再び申し出て来た三浦を、今度は尾本が彼のために二割ほど減る収入が「惜しく思われて来た」ことからやはり退けるが、津上の場合は「自信満々たる相手の態度」への「反撥」が安全策を退けさせ、事業を危険な「賭け」として行う決心をさせたのである。ここに事業そのものに賭けている尾本とは違った、津上の「賭け」が如何なるものであるのか、一つの暗示を見るように思われる。

この三浦との交渉に加えて、もう一つ、三浦と同じく事業に加わりたいと申し出てきた阪神工業の社長岡部弥太と津上の交渉を見てみたい。岡部は『新夕刊』に闘牛大会開催の社告が発表された日に、同じ伊予出身の田代を介して津上に面接を求め、焼跡の地下にある半造りの料亭で、田代も同席させたまま津上に大会終了後に闘牛の牛全部を買い取りたい気持ち伝えてくる。岡部の申し出は「もし共同出資で牛を買うのがご迷惑なら、牛は全部自分の方で買いとる。輸送費も大会開催費も、牛に関するものは一切こちらで面倒をみましょう。あなたの方は無償で事業をやり、儲けたいだけ儲けなさい」といったもので、資金力の乏しい大阪新夕刊としては願ってもない話だった。この

岡部の申し出を受けることで、事業は危険な賭けから逃れ、かなりの安全性を手に入れることができた筈だが、岡部に対する津上の応答は次のようであった。

「だが、そいつあ困りますな」

相手に喋るだけ喋らせてから津上は言った。岡部の申し出に応ずることは、岡部という人物からくる一抹の不安はあるにしても、新聞社としては決して割の悪い契約ではなかった。しかし津上はいま彼の上に注がれている岡部の、自信満々たる小さい二つの眼を憎んでいるのであった。何か果し合いでもしているような精神の興奮が、津上の顔をこころもち蒼くし昂然とさせていた。

津上は岡部の「自信満々たる小さい二つの眼」に対する憎しみから、好条件の彼の申し出を退けてしまった。三浦の場合と同様に、ここで相手の「自信満々」たる態度への反発心が、津上に安全策を退けさせ、「賭け」の要素を含んだまま事業を行う決心をさせたのである。

もっとも彼らの申し出を退けた津上の表面上の理由は、三浦に対しては全入場券に「清涼」を添附されると「お宅の方の資本でこの事業が行われたような印象を世間と与えやすい」からであり、岡部に対しては大阪新夕刊として「最初の事業」なので「単独でやらせて貰いたいからであった。がしかし、それはあくまで表面上で、津上にそうしたもつともらしい理由を言わせるのが、彼らの「自信満々」たる態度への反発心であるの言うまでもない。そのような三浦、岡部に対する津上の応じ方を見ると、津上は「自信満々」たる人間に反発する意識から、闘牛大会を、まさに「賭け」として行おうとしているかの観がある。津上は事業に情熱を傾けることで、自らの自尊心の勝敗を

賭けていたのではないだろうか。だからこそ大会初日に雨が降って失敗が決定的になった際に、次のような心境に陥るのである。

今やはつきりとした社の莫大な損失を、少しでも少なくしようとする尾本の持つ執着も焦りもなかった。あるものは、徐々に歴然として来る大きい誤算への、堪えられぬ寂寥感だけであった。四つに組んでじりじりと土俵際まで押して行きながら、軽く打棄りを喰った自分の不覚さへの堪らぬ不快感だった。彼は朝から自尊心と自信の喪失に対して本能的に闘っていた。津上の眼がこの日ぐらい冷たく傲岸に見えたことはなかった。

津上は闘牛大会の中で、事業そのものに賭けたのではなく、ましてさき子との関係を賭けたのではない。ここにさき子をして「賭けられるような人ではない」と言わしめる所似もある。彼が賭けたのは他人には覗い知ることの難しい極めて個人的な心の問題であった。津上は自らの「自尊心」の勝敗を賭け、そして敗北したのである。

ここでこの津上の「自尊心」の賭けには、福田宏年氏が井上文学の主要テーマの一つに挙げる「劣等感情」が、裏返しの形で現れていることを指摘しておかなければならない。自信満々たる二人の人間に負けまいとする津上の意識は、後の「澄賢坊覚え書」における宏栄に対する澄賢の、「ある偽作家の生涯」における大貫桂岳に対する原芳泉の、劣等意識による反発心に連なると考えられる。さらに言えば、先に述べた同じ福田氏の言う津上の中の「うつろなもの、空しいもの」も、この「劣等感情」と一続きのものと思わせるのではない。津上は真の自尊心を持たないが故に、内面に「うつろなもの、空しいもの」を抱え、そうした自分の内面への「挑戦」として「自尊心」を賭けた、

と考えられるのである。

以上のように、闘牛大会の中で、尾本や田代は事業そのものに賭け、さき子は愛人津上との関係を賭け、津上は自らの自尊心を賭け、それらの「賭け」がごとごとく敗北に終わる。そしてそれらの「賭け」と敗北により、この作品の「悲哀」のテーマが完成されていると考えてよいだろう。

しかしその「悲哀」が、作者の意図した通りに時代相の持つ「悲哀」を表しているかどうかは検討の余地がある。「闘牛」は、終戦間もなく創立された新興新聞社が、夥しいライバル紙に打ち勝つために「社運を賭した」事業を枠組みにして物語を構築しているのであるから、一篇が何らかの時代の空気に覆われていることは確かである。ところがその時代の空気を含んだ枠組みの中で、事業それ自体に賭けている尾本や田代はむしろ物語の周辺に配置されており、中心に描かれる津上やさき子が賭けているのは彼らの個人的な問題である。つまり「闘牛」における「悲哀」は、時代相の「悲哀」そのものと言うよりも、津上やさき子の個人的な「悲哀」がまず中心にあり、それを時代の空気で包み込んだ形のものだと考えられるのである。

例えば次の二つの場面を見れば、この作品に表された「悲哀」が如何なる質のものであるかよくわかるだろう。

見渡す限り冬枯れた田野が、球場を取りまいて西にも東にも拡がっていた。戦時中大阪神戸の主要な軍需工場は言い合合わせたようにこの阪神間の広い平原地帯に疎開して来たのだが、それらの不思議に重量感を忘れた建物が、ここからみると紙屑のように広い田野のあちこちに散らばっていた。なかには難破船のように沢

山の鉄骨を空に突き上げている建物もあれば、小山のような鉄屑の集塊を敷地の一角に持っている建物もあった。(中略)そして工場地帯の狼糞さと冬の自然のきびしさとが雑然と入り混じった広い荒涼とした眺望の上に、曇天が低く垂れ下がっているのであった。

さき子は黙ったままそうした寒々とした眺めに眼を遣っていたが、心は早くも今日の津上の冷たい態度から受ける、別れた後の自分の苦しさを計算していた。

津上の立っているスタンドの最上層からは、遠く六甲の山裾まで続いている田と畑と、その中に散在する工場や小さい家々の茂りが、重い暗灰色の雨雲の下に寒々と拡がって見えていた。瀬戸物の絵を見るような凍りついた冷たい風景であった。六甲の山巔（たて）近い箇所のところどころに、雪が白く幾条かの線を引いて残っていた。その頂の斑（はたれ）雪だけが現在の津上の疲労を救っていた。敗亡のこの国からすつかり姿を消した清らかなものが、落ちのびてそこだけに集まり、互いに寄り添ってひそひそと何かを語り合っているように思えるのであった。

前者は闘牛大会の準備に奔走する津上を阪神球場の事務所に尋ねたさき子が、津上に冷たくあしらわれた際の心境を語り、後者は大会初日に雨が降り、事業の失敗が確定された際の津上の心境を語っている。男の事業欲に愛情が叶わぬさき子の苦しみや、事業の失敗による自尊心の喪失に堪える津上の苦悩が、ともに阪神球場のスタンドから眺めた終戦間もない日本の荒涼とした風景の中に象徴され、時代の空気の

中に溶け込んだ一つの悲哀感となつて表されている。この二つの場面に見るように、「闘牛」における「悲哀」は、時代相を正面から描いたものではなく、津上とさき子の心境を中心に描きつつ、それを時代の空気に包み込むことで表現されているのである。

「悲哀」のテーマは、さき子が津上との関係の清算を牛の勝負に賭ける決意をした直後の一篇のクライマックスにおいて、さらに次のように描写される。

さき子は改めて会場を見渡した。リングでは赤と黒の二匹の牛が、まるで塑像のように身揺ぎもしないで立っていた。リングと竹矢来と、それを取り巻く群衆の上に、雨上がりの冬の陽が冷たく落ちていた。勢子たちは牛をけしかけるために牛の尻を敲き、脇腹を敲いていた。幟はばたばたと風にあおられ、マイクは動きのない仕合の放送に同じ言葉を何十遍も繰り返して、疲れ、苛立ち、悲鳴に近いものをとぎれとぎれに吐き出していた。スタンドは異様な静けさであった。笑いもなく、声もなく、観衆はじつとリングを見降ろしていた。突如この会場に立ちこめている暮色のように澱んだ黯い冷たいものが、ほとんど堪えられぬくらいの悲哀感となつてさき子の足を締めつけて来た。

右の場面は「『闘牛』について」で描かれている、井上靖が実際に見物に出掛けた闘牛大会の会場の様子を彷彿させ、おそらくここに作者がこの作品で最も表現したかった「悲哀」が托されていると考えられる。しかしその「悲哀」は作者が闘牛大会の会場で感じたという時代相の「悲哀」と言うよりも、まず津上との煮えきらぬまま続く関係に「疲れ、苛立ち」苦しんださき子の「悲哀」と思われる。次いでそ

のさき子の隣に津上が坐つていふことを考えると、津上の事業の失敗による「悲哀」も幾分か含まれているかもしれない。一篇のテーマが象徴されているであろうこの場面は、それだけで考えた場合、時代相がどれだけ表されているのか、甚だ疑問である。

しかし、いわば一篇の核として、賭けと敗北の事業のクライマックスに置かれていることを考慮すれば、その「悲哀」が時代の空気の中に包み込まれたものだと言うこともできよう。さらに付け加えれば、「闘牛」が発表された当時、戦後の荒廃の中で日本人は、誰もが何らかの悲哀を内面に抱えていたであろうと考えられ、そうした状況の中たとえ津上とさき子の個人的な「悲哀」であっても、ある種の時代的共感とともに、読者に迎えられたと言えるかもしれない。「闘牛」における「悲哀」がどのようなものか、ここにはつきりと示されている。このように「闘牛」は、その「悲哀」の核の部分に津上とさき子の心境を据えており、必ずしも、時代相を正面から描いているとは言えそうにない。だが、井上靖なりの方法で、戦後という時代の持つ「悲哀」を描いた作品であることもまた確かだろう。

むすび

井上靖は「闘牛」の執筆において、モデルである新大阪主催の闘牛大会を独自に意匠化して作品に取り込むことで、闘牛大会を通して「賭け」に挑み、敗北した人々を描いて時代相の「悲哀」を表現した小説を意図した。が、実際の「闘牛」は、自尊心を賭けて敗北した津

上の「悲哀」と、愛人との関係を賭けて敗北したさき子の「悲哀」を中心に描き、それを時代の空気に包み込んだ、この作者なりの時代の「悲哀」を表した小説となった。その意味で、この作品は必ずしも時代を正面から描いたとは言えないようにも思われる。だが、あるいはこうした時代相の描き方にこそ井上の言う「一種の社会小説」、つまり井上靖流の社会小説の本当の狙いがあったのかもしれない。「鬪牛」は決して失敗作ではなく、この作者独自の文学作品として重要な意味を持つ。

例えばモデルから材料を意匠化して取り込む方法は、「黯い潮」や「黒い蝶」に受け継がれ、やがて歴史小説に発展したと予想され、津上の「自尊心」の賭けに敗北した「悲哀」は、後の「澄賢坊覚え書」や「ある偽作家の生涯」のテーマの萌芽を見るように思われるし、また津上やさき子の心境を風景に托して描く象徴法は、前作「狐銃」と通底するものを感じさせる——が、これらの考察は別の機会に採つこととする。

註

(1) 本文の引用は全て『井上靖全集』第一巻(平七・四、新潮社)による。

(2) 『毎日新聞』昭二五・二・二

(3) 『日本経済新聞』昭五二・一・一〇

(4) 兵庫県立図書館郷土資料室蔵マイクロフィルム複写を参考にした。

(5) 二十六日付、二面「圧巻！横綱鬪牛戦」

(6) 二十二日付、二面「花火で空から御招待 市中を駆けるッカル

メンの曲々」(大見出し) 「あすの前奏行事 鬪牛神戸市中
行進・花火打あげ・サウンドトラック出動」(小見出し)

(7) 二十四日付、二面「牛との取組み二〇年鬪牛の名彫塑家岩田千
虎氏」(写真入)

(8) 十七、十八日付二面連載「宇和島に『鬪牛』を訪ねて」(赤岸
特派員発)。

(9) 二十二日付二面「街の話題はこの一点」の見出しの記事にその
記述あり。

(10) 二十五日付二面、中村浩之作、連載マンガ「隠居のクロさん」。
(11) 前日と同じ一面掲載。但しカットは異なり、化粧廻しをつけた
左向きの一頭の牛の写真を使用。

(12) 一面に「地元でも珍しい豪華取組み決る」の見出しの記事掲載。
(13) 一面に「気負い立つ牛力士」の見出しの記事と「あす前売開始」
の社告、二面に「伝統五百年の精華」の大見出しの記事を掲載。

(14) 大会初日の模様は二十五日付一面に「空もスッキリ鬪牛日和・
モー然開幕」の見出しで、最終日の模様は二十七日付二面に
「空もカラリと冬晴れ小晴！最後の鬪牛土俵に展開」の見出し
で、第一報が報せられている。

(15) 『虚往実帰—井上靖の小説世界』(昭六〇・三、右文書院)

(16) 三訂版、昭六二・五、新泉社

(17) 「文芸時評」(『東京新聞』昭二四・二・二二)

(18) 『井上靖の世界』(昭四七・九、講談社)

(19) 『文学界』昭二六・六

- (20) 『新潮』昭二六・一〇
- (21) 『文藝春秋』昭二五・七一〇
- (22) 書き下ろし、昭三〇・一〇、新潮社
- (23) 『文學界』昭二四・一〇

*引用文中の旧字体は新字体に改めた。

(たかぎ のぶゆき)